新建築

SHINKENCHIKU:2022

11

対馬博物館

設計　**能勢修治＋大橋航／石本建築事務所**（建築設計）　**紀伊健／トータルメディア開発研究所**（展示設計）
施工　星野・武末・三重特定建設工事共同企業体（I工区）　内山・昭大特定建設工事共同企業体（II工区）
所在地　長崎県対馬市
TSUSHIMA MUSEUM
architects: SHUJI NOSE＋KOU OHASHI ISHIMOTO ARCHITECTURAL & ENGINEERING FIRM
TAKESHI KII TOTAL MEDIA DEVELOPMENT INSTITUTE

南西側外観．対馬市による博物館の建設を機に，長崎県立歴史民俗資料館（現長崎県対馬歴史研究センター）を合築．宗家文書などの重要文化財に加え対馬の歴史・自然史関連資料を収蔵・展示する．既存館を稼働しながら収蔵機能を有する博物館を建設．収蔵品を移転後，既存館を解体し市民交流機能等を博物館機能に接続した．大屋根は3つの板状の屋根が重なる構成．屋根面は溶融亜鉛メッキステンレス鋼板立平葺き仕上げ．先端は厚み6mmの鋼板を使用．

ロビー．万松院の境内にあった木造の倉庫「御文庫」に宗祖の資料が保管されていたことから，「現代の御文庫」として展示室と収蔵庫が入る鉄筋コンクリートのヴォリュームを建物中央に配置．天井は高圧木毛セメント板，壁は無釉陶板煉瓦せっ器質タイルとスチール黒皮パネルを使用．天井高は15.8m.

西側アプローチ，外観．鉄筋コンクリートボイドスラブ屋根とした手前は市民用のギャラリーや体験学習室などが入る．2階の開口からは図書コーナーが見える．奥は鉄筋コンクリートヴォリュームと鉄骨の二重屋根構造で展示室や収蔵庫等が入る．

文化が積層する対馬

対馬は私にとって沖縄に次ぐふたつ目の島の博物館である．博物館のテーマを建築に反映することを常とする私にとって文化的な独自性・特異性が強い島の博物館は特に興味深い．沖縄は琉球王国の文化が色濃く継承され，対馬は古代から明治まで日本と大陸を繋ぐ玄関口として，文化のすべてが通過し積層した唯一の場所である．

三韓征伐時の御所跡，白村江の戦後に築かれた金田城，朝鮮出兵時の清水山城，遣唐使が船を乗換えた港跡など各時代の史跡が残る．また，対馬の仏像のほとんどが新羅など朝鮮由来のものである．江戸時代には対馬藩宗家が李氏朝鮮との外交を担い計12回の朝鮮通信使の対応窓口を務めた．それらの記録が宗家文書（重要文化財約5万冊）で対馬博物館の主要な収蔵品である．

博物館を構成する機能を大屋根の下で分節して積層し，それぞれのヴォリュームに歴史に耐える個性的なマテリアルを与え差別化した．宗家文書を納める収蔵庫を中心に展示，市民展示，体験学習などのヴォリュームが積層する構成である．

ステルスな博物館

敷地は厳原の山手にある対馬藩宗家の居城であった金石城跡である．城跡は文化財エリアであり現状変更には文化庁の許可が必要となる．外観は建物への仰角を最小限とする断面構成とし，ディテールを消したミニマルな板状の屋根が3枚重なるシンプルなものである．ハードはミニマルに，デザイン・様式は抽象化することで，歴史的文化的な景観への影響を最小限とするステルスな博物館の外観である．

（能勢修治／石本建築事務所）

物質性と歴史性

国境の島と呼ばれる対馬には今でも関連する数多くの遺跡が暮らしと隣り合い露わな姿で残る．対岸の韓国を目視でき，魏志倭人伝に詠まれた風景の痕跡，山頂からの海・山幸彦の神話すら感じるリアス式海岸の景色．交流や歴史といった言葉が普段とは異なったスケール濃度を持ってここでは存在している．過去との同化や模倣ではなく，歴史的感覚のある現代的価値の発見によってこれに対峙する．

建築は物質の集積である．物質には色と形があり，組み立て方をディテールと呼ぶ．そんな物質性に対する精度を高めていくことで，対馬が持つ歴史性に応える．

素材にはそれぞれの物語がある．陶器は一万年前のものが昨日まで使われていたかのように出土する．あるいは鉄は20世紀にいたるまでの人類の発展の歴史そのもののような素材だ．黒漆喰磨き仕上げは職人の腕とチームワークがそのまま表面となる．分節されたヴォリュームごとに相応しい物語を見出すようにして多用な素材を紡ぐ．

ディテールでは物の「そのまま」を第一に，最小限整えるような手法をとる．ブリッジの手摺りは，強度や視覚の遮蔽といった要求性能との一致から．島内で見られる板石をそのまま地面に突き刺してつくる石塀から着想を得て，等辺型鋼を立てるという選択している．端部をカットする際に斜めにするという最小の操作によって空間に統合する．

現代で既製品を使うことの合理性は否定できないが，人が空間と接触する部分にそれらがあると，この場所ならではの体験が損なわれてしまうのではないか．把手・コンセントボックス・鏡や家具・電柱までこの場所にふさわしいものを模索する．

これら試みがここにしかない価値となり，対馬の誇りを醸成する場の一助になることを願っている．

（大橋航／石本建築事務所）

西側全景．敷地は金石城の跡地に位置する．大屋根は石垣に沿うように角度をずらし，勾配は軒先を低くしてヴォリュームを抑えた．手前には復原された金石城の櫓門が立つ．*

南側鳥瞰．海洋交通により発展した対馬はリアス式海岸の入り江ごとに町が形成する．厳原は島内最大の港．

小屋（コヤ）．家財道具等を保管する高床の板倉．母屋から離れて群倉立地する．*

地域に残る江戸時代の防火壁．*

南より見る．軒先を極力石垣に近づけることで決定．最高高8,616mm ～軒先3,746mm．

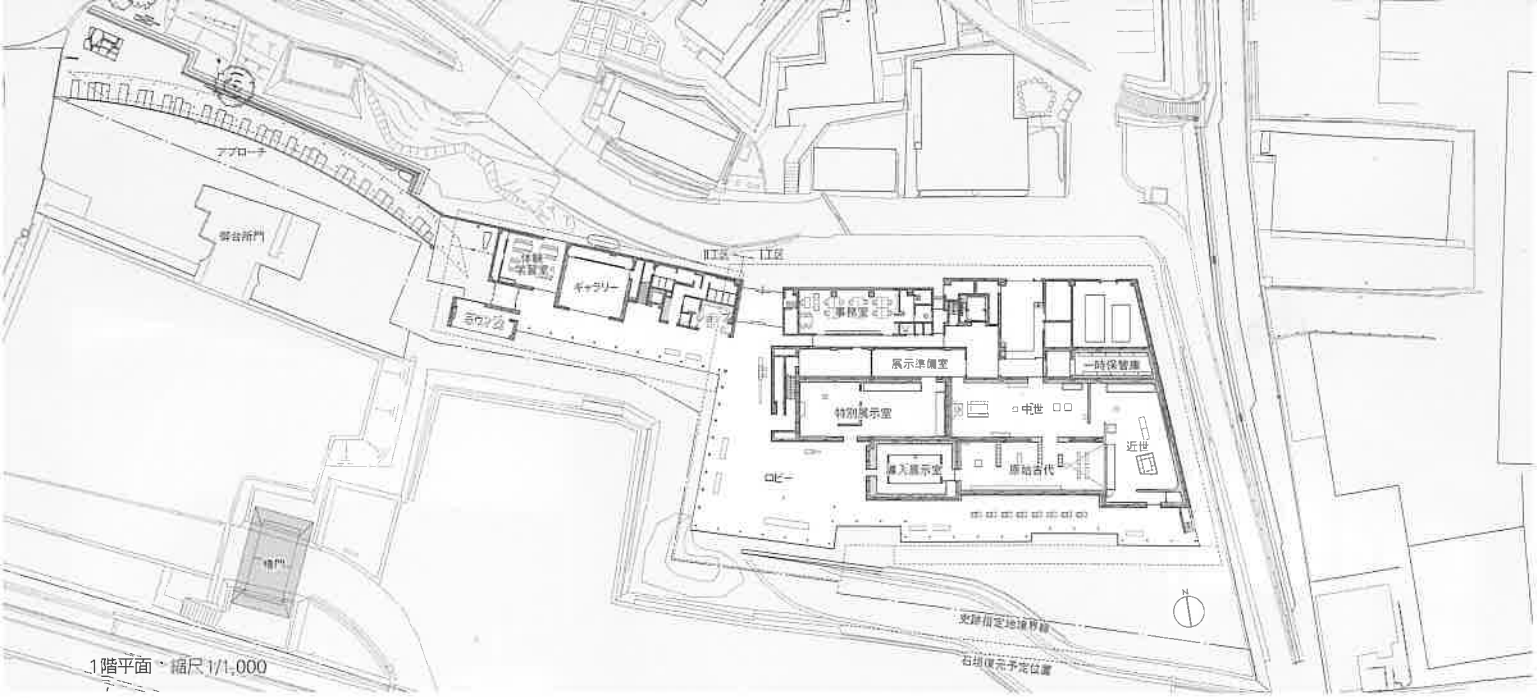
新たにデザインされた椅子．フレームはスチールアングルを一筆書きに曲げてつくられた*．

1階ロビーで開催された音楽会*．

配置　縮尺1/18,000

2階，保存修復室。壁はチール黒皮パネル。収蔵物の維持管理行為は資料数の膨大さと離島による資料移動リスクから館内で島内在住者が行う。

階ブリッジ，手摺は・溶融亜鉛メッキリン酸処理を施した等辺山形鋼を一つづつスラブ小口に固定する。ブリッシの天井高は10.8 ～ 2.02mとスケールが変化

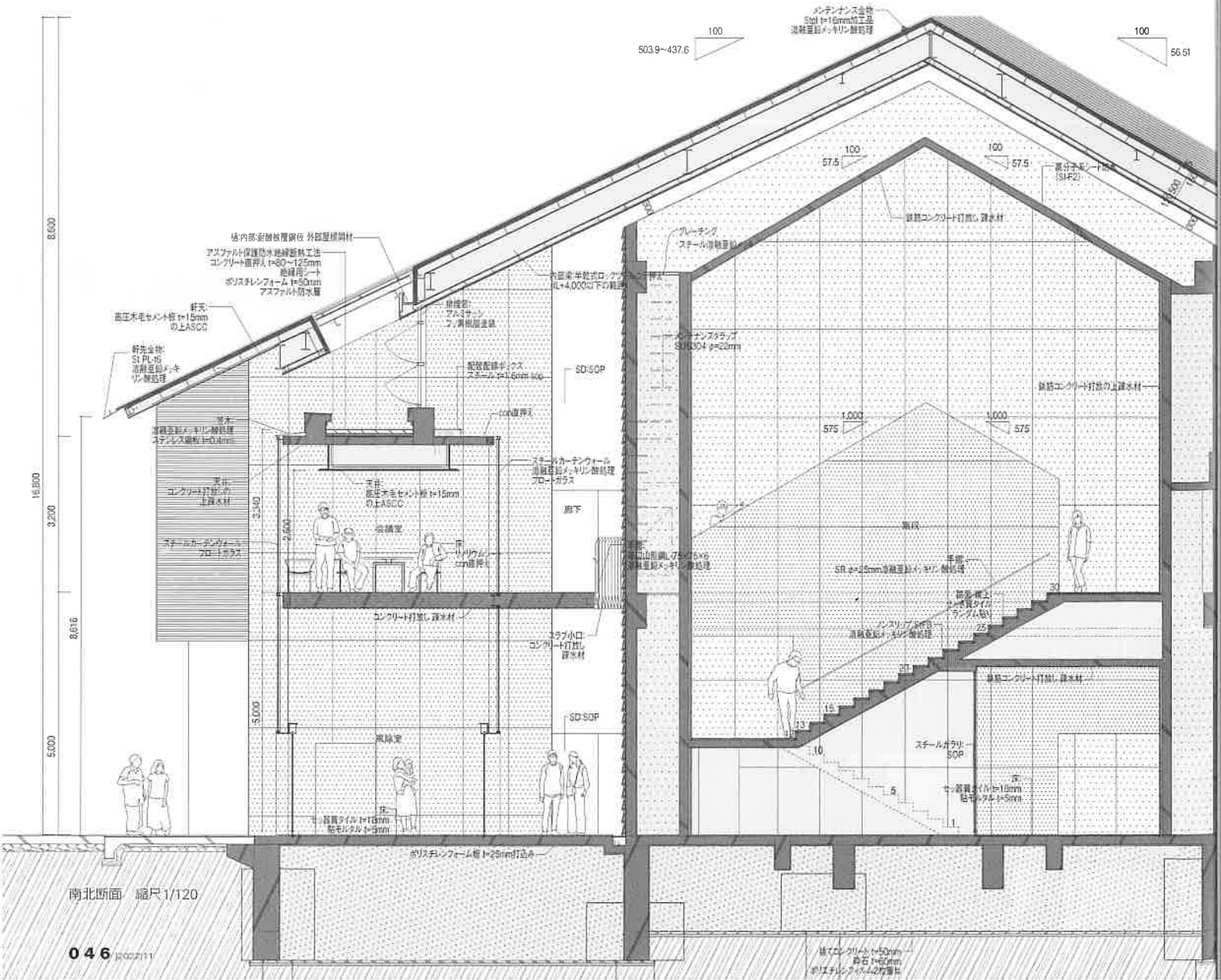


1階平面　縮尺 1/1,000

設計　建築　石本建築事務所
展示　トータルメディア開発研究所
照明デザイン
LIGHTING PLANNERS ASSOCIATES
ランドスケープ　小野寺康都市設計事務所
VI・サイン　6D
受付カウンター　日本デザインセンター
三澤デザイン研究室

施工　I工区／星野・武末・三重特定建設工事共同企業体
II工区／内山・昭大特定建設工事共同企業体
敷地面積　6,279.76m²
建築面積　3,253.63m²
延床面積　5,028.72m²
階数　地上3階
構造　鉄筋コンクリート造　一部鉄骨造

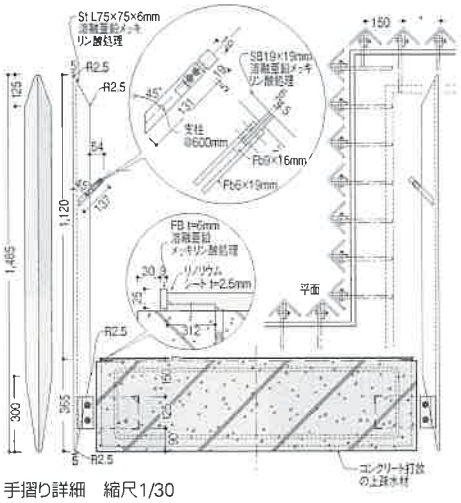
BEI（省エネルギー性能指標）　0.85
工期　I工区　2017年12月～2019年1月
II工区　2020年1月～2022年3月
撮影　阿野太一
*提供　石本建築事務所
（データシート182頁）



3階平面

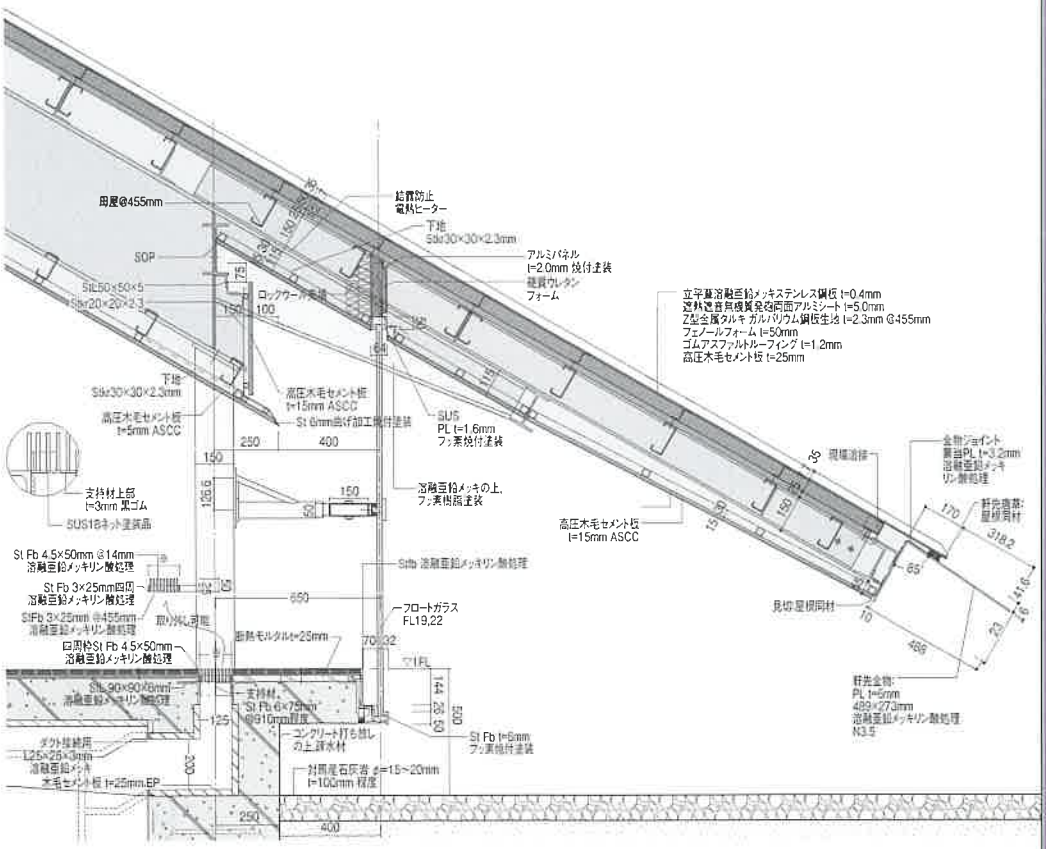
2階平面

3階，原始古代展示室．本計画は建築設計と展示設計が一体で発注されたため，空間構成・仕上マテリアル・ディテール・サイン等において建築と展示で設計・施工段階で調整行った．

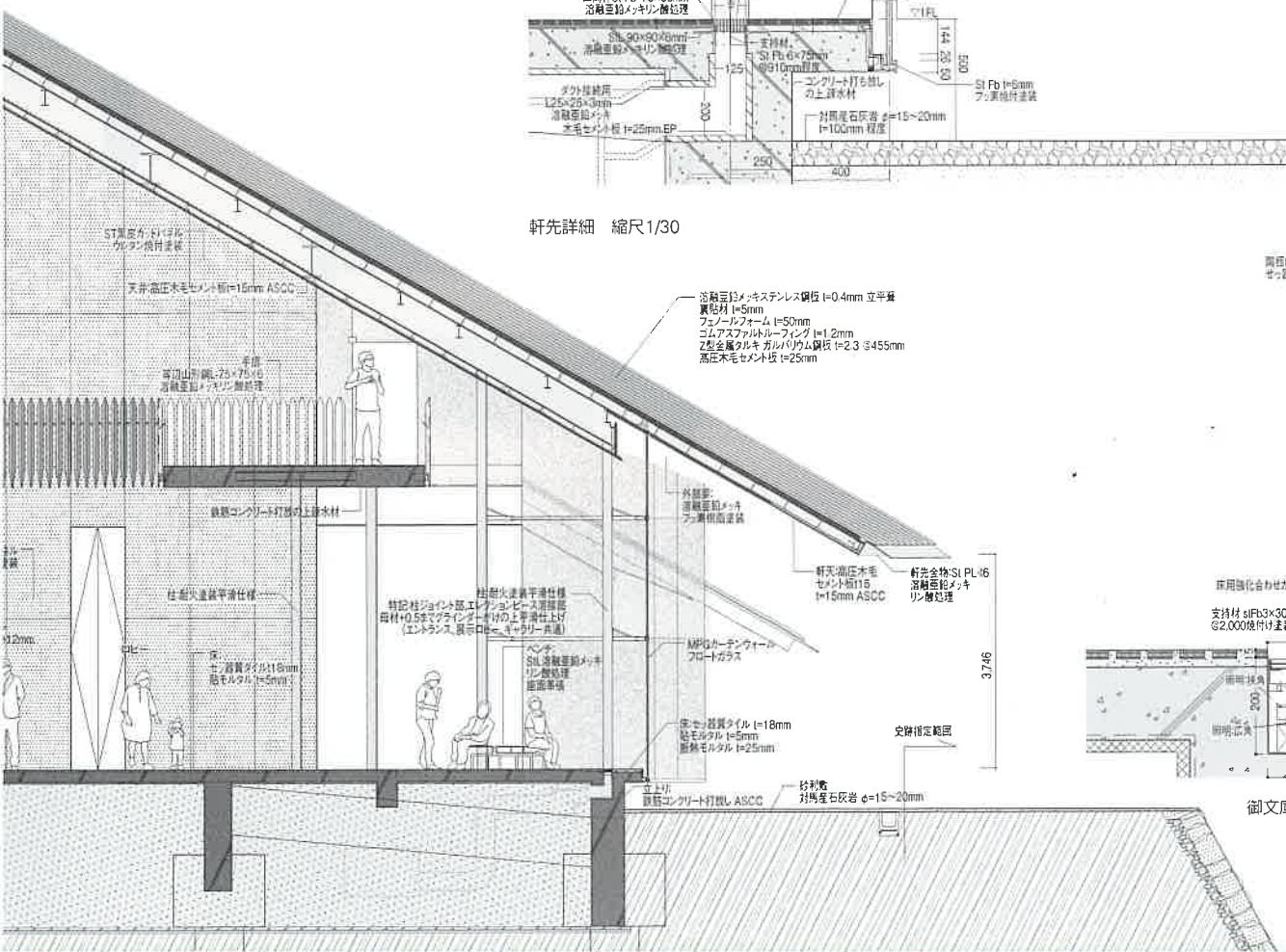


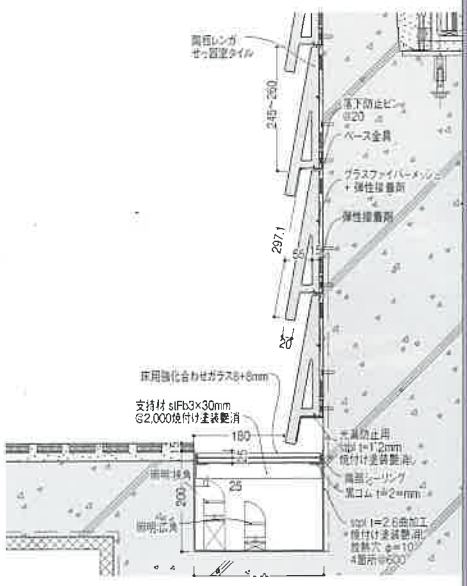
手摺り詳細　縮尺1/30

手摺りは全体に対して従属するものとしてではなく，個々のディテールを一つのプロダクトデザインのように独立したオブジェクトとして捉えた．



軒先詳細　縮尺1/30





御文庫壁詳細　縮尺1/15